

OBENTO GAYOSHI

おべんとう画用紙

著者：浜松市根洗学園／深澤孝史





おべんとう画用紙

浜松市根洗学園 / 深澤孝史

“考える”の本質を体験させてくれる「おべんとう画用紙」

深澤さんと子ども達との現場で生まれた「おべんとう画用紙」。2014年に続き、今回「子どもからの挑戦状」と題し、2回目の展覧会を開催することができました。学園の療育の中で、毎年続けてきたプログラムから、地域の保育園等3園の参加が加わり、開催できたことは、「おべんとう画用紙」が学園を飛び出し、地域とのつながりや関係性をつくっていった進化を感じています。

子どもの描いた絵が、子ども・家族・職員の多様な関係性を生み出しました。描いた絵に向き合い、苦しみ、悩みながらも読み解いていく家族とその中から出来上がるお弁当。そのプロセスを子どもの絵とお弁当とコメントを通して、イメージし、想いを馳せる職員や来場者。親子と重層的につながり、「きっとこうだったんじゃないかな～」「こうきたか」と思う感覚の共有が、作品の数だけ生ましていく場になっていたように思います。

お弁当をつくったママたちに話を聞くと、多くの方が「これは何なんだ？」と考えさせられ、悩んだと話されました。そして、「考えるのは大変だったけれど、面白かった、楽しかった」とも話されるのです。“考えること”をおもしろい、楽しいに変える「おべんとう画用紙」。

ふと“考えること”を苦痛なこととして、どこかで苦手意識を持ってしまっていないか？と思いました。“考えること”と面白さ、楽しさがシンプルに繋がりグッと感じられるというは、「おべんとう画用紙」が“考える”の本質を体験させてくれるものになっていました。ママたちのつくるお弁当から毎回感じている、子を慈しみ、日常を共にしているからこそ敵わなさとは別の新たな気付きでした。

「おべんとう画用紙」の可能性・進化・化学変化は、「おべんとう画用紙」がツールになって関係性を広げ、やり続ける中で、違う何かが見えてくるかもしれないとワクワクしています。

そして、ことばでないものの中から、読み解き、悩みながら自分の感覚と脳を総動員して見つけていくプロセスの体感は、ジェットコースターとは対極の体験プログラムのようです。そのように“考えること”をあきらめず、「子どもからの挑戦状」を真正面からドンと受けとめ続ける大人たちでありたいと思っています。

今年度実施した展覧会には県外も含め230人あまりにご来場いただき、このプログラムを共有することが出来たことを嬉しく思います。ご協力いただきました「はぐみな保育園」「住吉保育園」「豊田みなみ保育園」の皆様、ありがとうございました。来年以降も、「おべんとう画用紙」を通じて、関係性を広げて“やったことない”から見えてくるものを探し続けたいと考えております。

今後ともよろしくお願ひいたします。皆さんに感謝です。

浜松市根洗学園 園長 松本知子

おべんとう画用紙のつかいかた



子どもがおべんとう画用紙に絵を描きます。



お母さんが、絵を鑑賞し、再現するようにおべんとうをつくります。



完成したおべんとうの写真を撮ります。



一緒においしくいただきます。
食べたあとに感想を書きます。

1 子どもがおべんとう画用紙に絵を描きます。

2 お母さんが絵を鑑賞し、再現するようにおべんとうをつくります。

3 完成したおべんとうの写真を撮ります。

4 一緒においしくいただきます。食べた後に感想を書きます。

PHOTO

(今までの作品と展示風景)





お弁当作ってみると「へりない」と言われてしまったので私も入で食べてみました。「おいしいな～」と言って食べるうれしそうに見ていました。この日おなかの調子が悪くなかったのでしかたありませんが、また調子の良い時に一緒に食べれたらなぁと思いました。お弁当のわくの中にみず色でぬってあった所は本人が「サラダ」と言ったのでみず色ではないですが本人の好きなブロッコリーがつたかあると想いました。お弁当の娘を見て「これはなんに？」といいながら会話をし、子供の表現のしかたに大人では考えつかないような色使いなどをしていくまたちがった子供の表現の仕方に感心しました。







題：フレンチサイズ　お弁当　ロトリサフローレスラウ

感想
ママの朝ごはんがうまいです。アボカドはさきこのてちてて食べられます。おにぎりもうまいです。



題：まのくん　お弁当　まのくんママ

感想
おにぎりとおやつがうまいです。とても美味しいです。おにぎりはうまいです。



題：ひなちゃん　お弁当　お母さん

感想
おにぎり、あんこのおやつはうまいです。





EXHIBITION

(おべんとう画用紙展)

「おべんとう画用紙」を知っていただき、他の保育や療育の現場でも楽しんでもらえたらと、園外でも展覧会を開催しています。2回目となる2017年度に開催した展覧会には、他の保育園にも協力を呼び掛け、それぞれに実施したおべんとう画用紙を一堂に集め展示しました。

2014



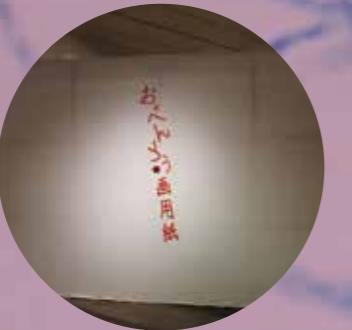
2018



おべんとう画用紙展
2014年1月11日(土)～26日(日)
静岡文化芸術大学西ギャラリー

[主催] 静岡文化芸術大学 磯村研究室・谷川研究室
[共催] 浜松市根洗学園
[協力] NPO法人クリエイティブサポートレッスン

おべんとう画用紙



おべんとう画用紙展
2018年2月10日(土)～18日(日)
黒板とキッチン(万年橋パークビル)

[主催] 浜松市根洗学園
[共催] 静岡県文化プログラム推進委員会
[協力] 子ども発達支援センターたっこ(社会福祉法人ひかりの園)
すみよし保育園(社会福祉法人住吉会)
はぐみな保育園(合同会社MiMo チルコロ)
豊田みなみ保育園(社会福祉法人染葉会)

子供の意図を様々なコミュニケーションを通して作られたお弁当は、どれも愛を感じ、見ていてほっこりしました。ただ、絵を形にするのではなく、子供の味覚や興味、相談するなど、五感を使って親子のコミュニケーションが垣間見える素敵な展示でした。

(30代・会社員)

お母さん達のイマジネーションのスゴさ。

(30代男性・会社員)

絵で描いたものを実際に作るのは、面白いと思いました。子供ができたらやってみたいです。子供も大人も楽しそう。発想がすごいと思いました。

(10代女性・学生)

どんなお弁当も親子のコミュニケーションが聞こえてくるようです。思わずお腹がすいてきて、「昔、自分の母親は、どんなお弁当を作ってくれたか？」と思い出しました。どんなお弁当もすてき！プロセスがいい！参加させてもらって良かったです。

(50代女性・保育関係者)

お弁当をとおして、親子が関わるその発想に驚きました。実際にできた作品を見て、いろいろなストーリーや、かたちがお弁当の中にあり、いい企画だなと思いました。

(20代女性・保育関係者)

親子の言葉とは違った掛け合い、コミュニケーションが見えて、おもしろかったです。子供が描いた絵の中にたくさんの思いや、意識が見えてきて、細い線や色や形、そのものにも興味を持ちました。余白がたくさんあったお弁当の絵（白い部分）もごはんの白をイメージしていて、なるほどなど。また、太さの違いだけで一色で描き上げていた絵もいいなあ～と思っていました。それを読み解いたり、対話したり、考えたり自分も一緒にになって考えたので、展示をしたことで、第3者も参加している気持ちになりました。

(30代)

楽しい取り組みで、良いコミュニケーションツールですね。作ったものがお子さんの狙っていたものとちょっと違ったとしても、お弁当をあけた時のキラキラドキドキいいなっと思います。平面を立体にすること（作り出すこと）・何なのか聞き取ること（人の話をちゃんと聞くこと）・わからないけど考えてみること（相手のことを思いながら）

(50代男性・会社員)

展示会場を通りかかり、何なく見てみたい気持ちになりました。自分の子どものことを振り返り、今のお弁当のカラフルさに少し驚き。子どもさんの絵を見て、それを形にする親の気持ちを思いました。この子は何を望んでいるのか、好きなもの嫌いなもの私は把握できているのかしら…なんて思いながら楽しそうに作っている姿を想像します。子どもさんの喜ぶ姿も目に浮かびます。ありがとうございました。

(70代女性)

保護者の想像力と表現力の苦悩を感じるとともに、その裏で行われた子どもとの会話をほほえましく思いました。

(20代男性)

自分の子のだけではなく、いろんなお子さんのお弁当用紙を見ることができて良かったです。皆さん、やっぱり絵を受け取った最初の印象は同じだったんだなあ…と感じました。また1年後、同じことをしてみたいと思います。子どもの成長を感じられるかもしれません（笑）

(30代女性・保護者)

アンパンマンポテトを使っている人がいて、全部自分で作らないといけないと思っていたのですが、これでもよいのだなと安心しました。たまに、お母さんのコメントで、「全部食べてくれなかった」というような事が書かれていて気になった。全部食べたお弁当と何が違ったんだろう。

(30代女性)

1枚1枚に子どもとお母さんやお父さん、おばあちゃんの関係がじみでていて、いっぱいの愛情に包まれた気分になりました。何回目かの挑戦で、子どもの成長を感じたり、お母さんの好きなお弁当を書いてくれた子がいたり…感動的でした。毎日つづく日常に、こういう企画があると、家族にとっても良い刺激とかきっかけになるんだなあと思いました。

(30代女性)

初めて見させていただきました。子供を思う親の思い（愛）が、伝わってきて、涙が出そうになりました。感動しました。子供の成長を捉えることができ、そして、喜ぶことのできる親御さん、本当に素敵だなと思いました。親子のコミュニケーションをとる事もでき、とても良い企画だと思いました。

(50代女性・行政関係)

初めにお話を伺った時は、想像が形にならなくて、「お母さん達、やってくれるかな？」と不安の方が強かったのですが、予想に反してとてもうれしい反響が…。「他の皆さんのお弁当にも愛情があふれていますね」「3回目のお弁当用紙」という方もいらっしゃって、うちも続けていけるといいな…、と感じました。寒い季節の展示でしたが、心はほっこり暖かくなりました。

(50代女性・参加園関係者)

なんの前情報も予備知識もなく来てしまいましたが、面白かったです。絵を完全再現しようとしているものもあり、意識して作っているものもあり、ご家庭の事情が見えつつ、面白かったです。青くするふりかけの存在を初めて知りました。

(30代女性)

子供の発想も親の発想も同時に見れて面白かった。子供の発想から作るとざん新な弁当ができますね。青の具の発想は、それそれで特に面白いです。

(不明)

おべんとう画用紙展 ~ わが子からの挑戦状 ~

臨床心理士 笹田夕美子

このたび、おべんとう画用紙についてのコメントを書かせていただくことになりました。ふだん、発達が気になる子どもたちと関わる心理士として働いていることもあり、「心理士の立場からみて、おべんとう画用紙についての意義を…」という依頼でした。「イイですよ！」と安請け合いしたものの、はてさて、正直、困っています。なぜならば、おべんとう画用紙は意義を語るまでもなく、あたりまえにすてきだからです。わざわざ心理士から見なくても、イイじゃないですか。それでも安請け合いした手前、何がイイかをあげてみますが…。

子どもたちがむりなく取り組めるのがイイ。

ちょっとかいてできあがりでも、ぐるぐる・ガンガンかいてもいい。どんな色を使っても間違いもなければ失敗もない。顔をかいても「キャラ弁かな?」「かまぼこかも?」はみ出しても「大盛りか?」

先生の準備が、かんたんなのがイイ。

先生の準備は橢円をかいた「おべんとう画用紙」とクレヨンを用意して

「さあ、どうぞ」だけ。教えることは何もない。あとはただおもしろがっていればいい。

園でやったことを、おうちに持ち帰ってくるのがイイ。

大人は園での子どもの様子に思いをはせる。あっちの出来事とこっちの思いが交錯する。

家族（お母さんやお父さん）がドキドキするのがイイ。

持ち帰ったわが子の絵は自分への宿題。人ごとではないのだ。親は絵をくい入るように眺め、子どもの好きなもの、やりそうなことをあれこれ考える。あること、ないこと考える。こんなに真剣に子どもの絵をみつめ、あれこれ考えたことがあるだろうか。

子どもが正解をにぎっているのがイイ。

大人は子どもにきいてみたりもする。子どもは答えてくれたり、答えてくれなかったり。言うこともコロコロ変わったり頑固一徹だったり「ちがう」の一点張りだったり。いつもは大人が正解を握っている気でいるが、

今回は子どもが言うことが絶対正解になる。

ズレがイイ。

必死で考え、大人がひねり出した答えは、たいていズレている。子どもはおべんとうのことなど考えてなかったかもしれないし、そもそもこの絵は「わが子からの挑戦状」ではない。いや、そんなこと、重々承知でやっているのだから、ズレているなんて言う心理士がズレている。もはやズレてなんぼ、そこにこそ価値が生まれ、ズレたもの勝ちな気さえしてくる。そもそも「わかってる」なんて思っているときこそ危険なのかもしれない。

大人のあそび心が垣間見えるのがイイ。

「あのお母さんがこれを…！」などといつもと違う顔が見え隠れする。親子のふだんの様子を知っていると、なおさら楽しい。

食べられるのがイイ。

「あってるのかどうかわかりませんが、おいしそうに食べました」とか「子どもはまったく食べませんでしたが、

うれしそうでした」など、おべんとうの再現性と、わが子がそれを食べる・食べないはまた別の話。いろんな結果があるのが楽しい。

他人がみてもイイ。

そんな宿題を園に提出する。園の先生も家での親子のやりとりに思いを馳せながら眺めているにちがいない。そんなこんなやりとりがさらに展覧会になり、他人がみても微笑ましい。「自分だったらこれは…」なんて考えたりもして。

ほらやっぱり、何をかいても蛇足にしかならない…そんな虚しさを感じつつ。イイネ！



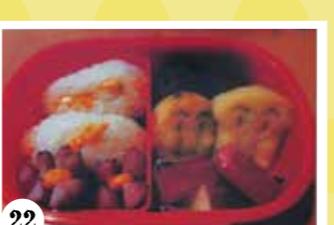
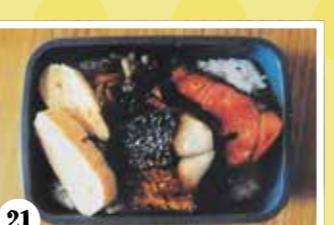
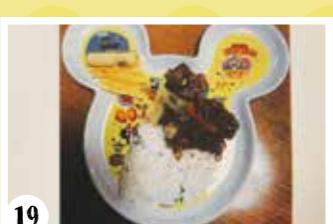
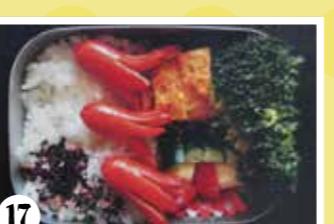
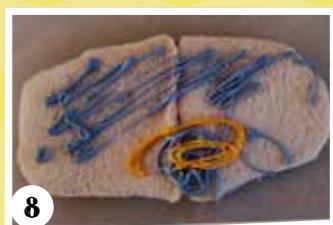
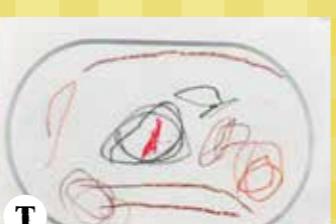
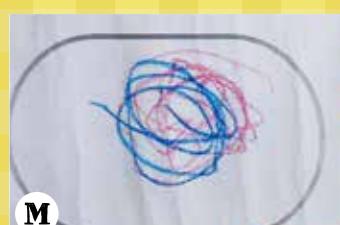
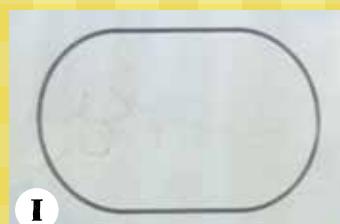
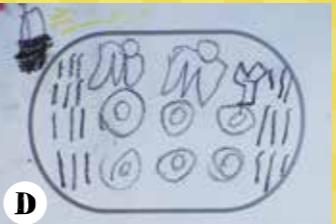
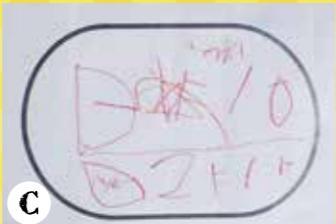
笹田 夕美子
(臨床心理士)

療育センター臨床心理士として、発達の気になる子どもたちとそのご家族の相談・療育に携わる。また、「ぶっとびアート」という団体を村松弘美とともに企画運営し、ユニークな個性をもつ子どもたちと、子どもをとりまく大人のための場作りワークショップを月に一度行っている。

QUIZ?

クイズ

子どもが描いたお弁当用紙を読み解いて、
お母さんが作ったお弁当を当てて見よう！



M=4, N=24, O=13, P=6, Q=1, R=21, S=2, T=23, U=7, V=3, W=5, X=12
A=11, B=8, C=9, D=15, E=20, F=10, G=18, H=19, I=22, J=16, K=17, L=14,
《正解》

2008年から2013年の間、美術家の深澤孝史さんを招いて毎月「アートのじかん」を実施していました。「擬音のえほん」「どうぶつずかん」「原稿用紙」「どろ絵の具」「大きな紙に描く」など、深澤さんが考えてくれた様々なプログラムを子どもたち先生と一緒にやって取り組みました。

「おべんとう画用紙」は、その中から生まれたひとつのプログラムです。ある時、先生が子どもの絵に円を描き加えて、お弁当に見立てる遊びをしているところから、深澤さんが着想を得てプログラム化したものです。

お弁当箱に見立てた楕円が印刷された画用紙を子どもたちに渡して、子どもたちにお弁当の中身を描いてもらいます。明確に形のわかるものから、落書きのような絵だったり、好きな新幹線の絵を描く子などさまざまですが、特に強制はしません。描きあがった絵を家に持ち帰り、それを元にお母さんや家族が実際のお弁当をつくります。「これはなに?」と聞いて言われたものを入れたり、教えてもらえば子どもの好きな食べ物に置き換えたり、食べられるようになってほしい食材を入れたり、はたまた、食紅なども駆使して絵の再現に試みたり、解釈や取り組み方は家族によってさまざまです。その後、出来上がりを写真に撮り、コメントと一緒に提出してもらっています。

学園では、毎年恒例のプログラムになっていて、入園したての年少さんたちには必ず行ってもらい、子どもの絵、お弁当の写真、コメントをセットにして、園内に展示しています。



深澤 孝史 ふかさわ・たかふみ

美術家。1984年山梨県生まれ。場や歴史、そこに関わる人の特性に着目し、他者と共に方法を模索するプロジェクトを全国各地で展開。主な活動として、漂着神の伝説が数多く残る町で、漂着廃棄物を現代の漂着神として祀る神社を建立した《神話の続き》(2017、奥能登国際芸術祭)、八戸のスケート文化の発祥の地であるため池を再現する《堤にもどる》(2017、はっちアーティストインレジデンス)、埋もれた地域の歴史を現代に結びつけ直すことで、市民の主権と文化の獲得を目指す《常陸佐竹市》(2016、茨城県北芸術祭)、里山に民泊し、土地特有の近代化の資料を集めていく《越後妻有民俗泊物館》(2015、第6回大地の芸術祭)、お金のかわりに自身のとくいなことを運用する《とくいの銀行》(2011、取手アートプロジェクトほか)など。



主な展覧会

- 2006 取手アートプロジェクト 2006 [茨城]
- 2007 深澤孝史／高杉悦生二人展
Gallery sensenci [静岡]
- 2007 Wあつしの大運動会 BankART [神奈川]
- 2012 越後妻有大地の芸術祭 [新潟]
- 2010 取手アートプロジェクト [茨城]
- 2013 山口情報芸術センター 10周年記念祭 [山口]
- 2014 おべんとう画用紙
静岡文化芸術大学ギャラリー [静岡]
- 2014 めぐるりアート静岡 ギャラリーとりこ [静岡]
- 2014 札幌国際芸術祭 2014 [北海道]
- 2014 富士の山ビエンナーレ [静岡]
- 2015 大地の芸術祭
越後妻有アートトリエンナーレ 2015 [新潟]
- 2016 茨城県北芸術祭 [茨城]
- 2017 本郷新記念札幌彫刻美術館 家族の肖像展 [北海道]
- 2017 奥能登国際芸術祭 [石川]
- 2018 大阪クリエイティブアーキペラゴ [大阪]



《常陸佐竹市》2016



《西国よしあし街道 蚕の市》2018



《神話の続き》2017



《とくいの銀行 山口》2013

ABOUT

(浜松市根洗学園)

学園の概要

施設種別 児童発達支援センター(児童福祉法第43条)
名 称 浜松市根洗学園 所在地／浜松市根洗町667の1
設置主体 浜松市 経営主体／社会福祉法人ひかりの園

沿革

- 昭和49年 4月 1日………開園 定員30名
- 昭和50年 4月 1日………施設内学級小学校部1学級設置
(浜松市立豊岡小学校)
- 昭和51年 3月31日………園舎増設工事完了(50／11～)
定員80名に増員 幼児部設置
- 昭和51年 4月 1日………定員80名に増員 幼児部設置
小学校部2学級となる
- 昭和52年 4月 1日………施設内学級中学校部1学級設置
(浜松市立北星中学校)
- 高等部設置
- 昭和52年12月26日………運動場拡張工事完了(52／9～)
- 昭和53年 4月 1日………小学校部3学級、中学校部2学級となる
- 昭和54年 4月 1日………義務教育実施 小学校部1学級となる
- 昭和55年 4月 1日………中学校部1学級となる 暫定々員適用実施
- 昭和56年 3月31日………小学校部閉鎖
- 昭和58年 3月31日………中学校部閉鎖
- 平成 元年 3月31日………高等部閉鎖
- 平成 元年 4月 1日………幼児部のみとなる
- 平成 2年11月 1日………親子通園事業「土曜教室」開設
- 平成 4年 4月 1日………「土曜教室」を平日に移行、「子りすグループ」と名付ける
- 平成 4年10月 1日………親子通園事業の浜松市内利用児に「浜松市心身障害児(者)施設機能利用事業」を適用
- 平成 5年 1月31日………園舎大規模修繕工事完了(4／8～)
- 平成11年 4月 1日………施設種別名を知的障害児通園施設に変更
- 平成13年 4月 1日………親子通園事業に「子じぐるーぶ」(幼稚園、保育所在籍児対象)を増設
- 平成15年10月 1日………浜松市より公立保育園への巡回相談の依頼を受ける
- 平成18年 4月 1日………指定管理制度導入
- 平成18年10月 1日………自立支援法施行により、施設支援事業所となる。
- 平成21年 4月 1日………浜松市より発達支援広場を受託(西区)
- 平成22年 8月 1日………浜松市より子育て支援拠点事業を受託

【北区】

- 平成23年 3月31日………新事務室の増設工事・ブレイルーム改築工事完了(12／15～)
- 平成23年 4月 1日………暫定定員55名より定員80名に変更。

浜松市より併行通園サポート事業を受託【所轄:障害福祉課】

浜松市より発達支援広場(施設型)を受託【所轄:子育て支援課】
 通園バス1台増設(合計3台となる。運転手1名の増員)
 定員増に伴い、選択療育部門「にじ(母子通園)」「らいおん(併行療育)」を開設。定員10名。
 子育て支援拠点事業は第2種事業となる。定款変更。
 和室及びフレールームの雨漏り修繕、園舎壁面の爆裂箇所の修繕、車庫の塗装修繕を実施。
 平成24年 4月 1日………児童福祉制度の改正により第2種社会福祉事業となる。定款変更。
 知的障害児通園施設より児童発達支援センターへ名称変更。併行通園サポート事業は、障害児通園事業として、児童発達センターでの療育に吸収され、実施する。
 保所等訪問支援事業の実施。これまで実施してきた学齢児への療育は法人として放課後等デイサービスへ移行して実施。

定 員	80名
敷 地	4,904m ²
建物、設備	園舎(鉄筋コンクリート平屋建)1,037m ² 車庫(鉄筋カラー折板)130m ² ブール84m ² 事務所(軽量鉄骨造平屋建・プレハブ工法)79.5m ²
駐 車 場	市より借地1926.68m ²

おべんとう用紙

著者：浜松市根洗学園

深澤孝史

2018年3月23日発行

発行人：松本知子（浜松市根洗学園）

デザイン：ウエダトモミ

2017年度静岡県文化プログラム採択

《静岡県文化プログラム》

2020年オリンピック・パラリンピック東京大会に向け、オリンピック憲章で開催が定められた「文化プログラム」が、日本全国で展開されます。静岡県文化プログラム推進委員会は、文化・芸術振興や文化・芸術による地域・社会課題対応を目指して、様々な団体等との協働による取組を進めています。



